

高木 護

木賃宿に
雨が降る



未來社

木賃宿に雨が降る

高木 護

未來社

木賃宿に雨が降る

一九八〇年二月二十九日 第一刷発行

定価 一三〇〇円

©著者 高木 護

発行者 西谷 能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三―七―二

電話〇三(八一四)五五二―番

振替・東京七―八七三八五番

本文組版／ふじ活版

本文印刷／萩原印刷

製 本／今泉誠文社

木賃宿に雨が降る

目次

ハンガーのようなおっさんのこと

7

童貞くらべ

14

天使を拾った話

20

あたい、たまらない

28

女が天使になるとき

33

青カンについて

39

泥んこの花

46

のんべんだらり

51

いらっしゃいWCのこと

55

馬鹿な男

64

十年経ったら

68

淋しい詩

72

独りごつ(一)

77

おべっかのたのしさ

83

空想で犯した女たち

87

あかしな記憶	93
三年待ったら	99
これから先	107
あかしな詩	112
好きな言葉	116
夢	121
好きなもの	128
涙	131
美しいものが美しく見えない	135
飢えてゐる	138
悪い癖	144
へんな詩	148
独りごつ(二)	151
告白	159
さよなら	161

ただいま出発します

しあわせになりたい

172 165

日記から

176

消える

192

らくがき

193

独りごつ (三)

197

みだらな詩

204

風便り

209

嘘

213

なつっこい狸

217

特技のようなもの

222

もういっぺん逢ってみたい人たち

やめたくなかった職のこと

244

○

あとがき

255

木賃宿に雨が降る

ハンガーのようなおっさんのこと

西九州のある港町で、わたしは蚊の鳴き声ぐらいの理由から、喧嘩したことがあった。

相手は多勢だったのに、こちらときたら無勢で、しこたま殴られた上に、殴られたわたしのほうがサツのご厄介になった。

わたしは豚箱入りなどの趣味は持ってなかったが（豚箱もトルコ風呂も、どっちがどっちか区別がつかなくなったら、一人前だそうである。何が一人前なのか、よく判らないけれど）、ガチャリと鍵の締る音を聞いてから、箱の中をゆっくり見まわすと、先客がいた。まったく壁みたいに静かな野郎で、どこかの学校の校長先生のような鼻髭のおっさんだった。

「お邪魔します」

とりあえず、わたしは先客に挨拶した。

「……………」

おっさんは壁に張りついたまま見向きもしないので、

「この人、耳ツンボかいな」と憎たれ口をたたいた。

「こら、静かにせんかい！」

おっさんの返事の代わりに、看守の叱咤がとんできた。

わたしはおっさんと肝胆相照らすような話はしなかったが、鼻髭のおっさんは無銭飲食の常習のことだった。しかも、一ヵ月に一度か二度、それを土曜日の午後からやらかすらしかった。おっさんからしたら、無銭飲食は持病のようなものだったのかもしれない。

一晩泊りで、わたしもおっさんも、同時に釈放されることになった。取り上げられていた所有物のバンドや手拭や全財産の風呂敷包みを、わたしは受け取った。

「これだけだったな？」

「——はい」

「ご苦労さん」

係りのお巡りさんから、声がかかった。

熱いお茶も出た。

またきたまえ、とそんなことはいわなかったが、係りのお巡りさんは白髪頭をしていた。わたしとおっさんをにこにこ顔で眺めた。そして、

「わゝははは……」

と笑った。

わたしは頭を掻いた。じつは心のほうが痒くてたまらなかったのだけど、手っ取り早い頭のほうを掻いた。

済みませんというように、べこんとした。

わたしとおっさんは肩を並べて、町を歩いた。

港町はからっとした青空を頂いていた。

一泊五十円なりの宿があるから、気が向くようだったらおいでなさいという、おっさんのかような申し出に、わたしは頷いた。

おっさんの後から、のこのこついて行った。

もちろん、われらが愛する木賃宿にであった。

ところで、木賃宿のことを「きせん（木賃）」を払って泊るところ、一つの部屋に何人も泊るところ、とある辞書では説明してあったが、これはいい。

露天や野宿から、宿というものはじまる。そこからしても、宿というものは木賃のかたちでなくてはである。つらつら思うに、宿の元祖こそ、木賃宿であったはずである。

それなのに、ある辞書などでは、われらが愛する木賃宿について、「下等の宿屋」と説明してあ

だが、何たることや。ついでに言えば、その辞書はさらに「人夫」を「人足」などとも説明してあった。嘘八百の出鱈目とはいわないが、あまりにも高姿勢の頭ごなしの解釈ではないか。差別もいいところである。木賃宿も人夫も、オール最低という侮蔑の意味つけをしているが、そんな傲慢な心に呪いあれ。

（われら人夫風情はサイテイで、意味つけをした辞書学者先生たちが、最高人間というわけだろうか。）

人夫とは「裸一貫を元手に働く労働者」とか、木賃宿とは「宿賃の安いところ」とかというように説明できないのか。

ともあれ、わたしはおっさんの住みついているという木賃宿に、相宿させてもらうことにした。

無銭飲食常習のおっさんをよく観察していると、一日一食主義のようだった。

おっさんの職は拾い屋とのことだから、ついでにそこの食い萍でも拾ってくれば、一日に一食なんて切り詰めなくともよからうにと思った。それとも、一日一食主義というのは、おっさんの容易ならぬ決意でもあつてのことだろうか、とも思った。

それから、おっさんはほんとにハンガーのような壁好きのようだった。朝方、ちょっとだけ拾いに出かけるだけで、後はひねもす宿の壁に凭れていた。

そうしていると、おっさんが壁なのか、壁がおっさんなのか判らなくなってきた。

「何か、ええことでも、浮かんでくるとかな」

わたしが聞くと、

「莫迦こけ」

「なしな？」

「せっかくこうやっているのに、考えごとなんか、そげん大儀なことばせん」

とおっさんはぶつくさはざいたが、まるでハンガーと話しているようだった。

おっさんはそうしていると、無念無想の心境にでもなるのかもしれない。して、そうすること
で、壁になる修行でもやっているのかもしれない。

ある日のこと、いつものように壁にならなかったハンガーのようなおっさんを、わたしはあり合
わせた。紙に、鉛筆で写生していた。

「なあ、おまえ……」

めずらしく、おっさんのほうから話しかけてきた。

「なんかいた」

「わしがの、光って見えんじゃろうか」

「光るといふと、ピカピカいた」

「あの、青く見えんじゃろうか」

「そうたいな、おっさんは上等のハンガーのごたる」

とうとうおかしくなってきたのだろうか。

「わしゃの、えらい熱くなってきたぞ、キラキラ光って見えんじやろうか」

「夕陽が射し込んできたけん、光って見えんこともなかない」

「そうか、やっぱりの」

「……………」

わたしは写生のおっさんの図に、ペケをつけた。

「そんなら、どれ、行ってきょうか」

「どこへかい」

「ええところだの」

おっさんはひょいと立ちあがって、おのれのハンガーを外すごとくに壁から離れ、瘦せこけたノッポの後ろ姿を残して、どこかへ出かけて行った。

豚箱を出て、この港町の木賃宿にわたしが住みつくようになってから、一月近くなっていた。おっさんの真似をしたわけではなかったが、わたしも一日一食か、二食しかありつけないでいた。

そういえば、きょうは土曜日あたりであった。

わたしはハハン、そうかいなと思った。

おっさんは出かけたなり、その夜はやっぱり宿には帰ってこなかった。

（おっさんはまたもや持病のようなものが起きたのだろうか。それがめでたく成功して、豚箱入りということになったのだろうか。）

その翌日、

「おっさん、さよなら」

わたしは、宿の壁に向かって言葉をかけ、鯖の背のように青く、こよなく晴れ渡った港町を後にした。

童貞くらべ

これも、北九州の八幡の宿での話である。

消燈時間は九時になっていたが、そう時間どおりに眠られるものではなかった。銭のあるやつらなら、こっそり外出して、チュウを飲んだり安目の博打にうつつをぬかすだろうが、銭などがあるはずがなく、オケラの助ときていた。

宿の人夫たちで、銭もないのに夜の夜中まで外をほうつき歩くような心がけの者は、ただの一匹もいなかった。

こうなったら、宿のゴザのような薄っぺらな布団に、斬られ与三郎の心境で体を投げ出しているしかなかった。

「ああ、いっちょん眠りがこんたい」

「ほんにな、こげん晩はな、もちゃもちゃっとしたっと一発やりたかのう」

「イソやん、あんたはよかない」